

「モノと情報」班全体報告

アジア・熱帯モンスーン地域における生態史のなかのモノと情報 —時空間軸をベースとするマルチメディア・生態誌アーカイブズの構築を目指して—

秋道智彌（総合地球環境学研究所） 久保正敏（国立民族学博物館） 田口理恵（総合地球環境学研究所）

1. 目的と展望¹

モノと情報班は、平成15年度の途中からスタートした作業や研究会等の活動のなかで、徐々に形作られてきた班である。班立ち上げのきっかけは、プロジェクト・リーダーより投げかけられた一つの課題にある。生態史プロジェクトの目的が、1945年から2005年の60年間の、東南アジア大陸部メコン河流域地域にみる人間集団と環境との相互作用の複合的な歴史を明らかにすることにあり、その目的に対して、1. 資源管理、2. 生業複合、3. 栄養と健康と、それぞれの軸に即して個々のフィールド調査が進められる。それらフィールド調査からは、生物資源研究における従来からの方法と視点による有力なデータ収集と解析の成果が期待できるだろう。が、しかし、三つの軸からの収集データと成果を、相互に関連づけ連動させていくには、どうしたらいいのか。そのための具体的な手段と方法を考えることが与えられた課題である。

プロジェクト・リーダーからの課題を踏まえつつ、1945～2005年という時間の幅でメコン河流域地域の生態史を再構成するプロジェクトの目的を斟酌した際、われわれは物質文化や有形の資料の分析が鍵となる重要な研究対象となるものと考えた。つまり、同地域における諸民族集団は、周囲の生態環境や外部の社会・政治・経済的な条件との相互作用を通じて、生活や文化に根ざしたさまざまな道具・技術を生みだしてきた。そのなかには、東南アジア・熱帯モンスーン地域に特有の稲作農業や狩猟および淡水漁撈に不可欠な技術、食料の運搬・加工・保存技術、布・染色・織物の技法、疾病や感染症の治療に関する治療技法、遊びや娯楽の道具、土着のアニミズムや上座部仏教の実践に関わる呪具・儀礼用具などが含まれる。しかも、生活の多面的な領域で利用される技術とそこで用いられる諸道具は、民族集団の同一性や文化的な伝統に根ざしたものであるとはいえ、歴史や地域を超えてまったく何の変化もなく持続してきたのではかならずしもない。生態環境に大きく規定された技術から、外部の経済条件や他集団との接触、人の移動や技術移転などを通じて変化、変容を遂げてきた技法・技術やモノ（道具）、新たに外部社会から導入され、従来のモノを駆逐し浸透したもので、個別ローカルな生活空間内で利用される技術とモノそれぞれに多様な履歴が内在しているといっていよう。そして個別のモノへの詳細な観察から、個別のモノを構成し、もしくは利用にみる諸要素間の関係とその分析を組み合わせることは、モノに刻まれた多様な履歴を引き出し、全体として理解しようとする試みとなる。こうした試みは、生態史理解に向けた新たな方法を提案することにもつながるものと考えている。

むしろ個別のモノが全体をすべからく表すものであるかは、議論すべきところだが、それでも物質としてのモノ、言い換えればモノという存在の個性性、独立性は明らかである。同時に、その材料、製作、流通、象徴的利用などをめぐる知と身体技法や観念などは、個別のモノのなかにはいわば埋め込まれ（embedded）、宿っている（nested）と見なすことができる。モノと情報班では、主に稲作農業や狩猟採集、淡水漁撈に不可欠な技術および、食料の運搬に関わる道具・技術に注目し、研究会を通してそれらの道具の検討を重ねてきたが、それらのモノの多くは、本来、生態環境に由来し、また人と自然環境の相互作用の具体的な場面・場面に介在するものであるからだ。したがって、それらのモノを詳細に観察するという事は、人と自然環境の相互作用の具体的な場面の痕跡を扱うことであり、さらに、人々の営為も生態環境も、双方の変化の動態を展望することにもなる。モノ研究と生物資源研究を統合化する可能性はきわめて大きいといわなければならない²。

また、上述の問題意識にたてば、すでに国内に現存する収集資料もきわめて重要な研究対象となることを指摘しておきたい。というのは、モノの変容・変化に注目するならば、過去の収集資料は、調査地の状況を時系列に沿って分析するために不可欠な情報を提供してくれる。これを現地調査から得られる分析結果と比較対照することにより、個別のモノがもつ意味を立体的に提示することが可能になるだろう。

実際に東南アジア大陸部では、日本人調査団による調査収集活動が積極的に行われてきており、その収集資

料と関連情報が国内各地の博物館に蓄積されている。例えば、日本民族学協会による東南アジア稲作民族文化総合調査（1957～58年実施、国立民族学博物館所蔵）や、それとほぼ同時期に実施された大阪市立大学による学術調査、あるいは上智大学西北タイ歴史・文化調査団（1969～74年実施、南山大学人類学博物館所蔵）がある。特に、生態史プロジェクトにおいて、生物資源研究のフィールド調査が多角的に実施されるラオスの場合、1975年の政変以降、1980年代末まで事実上の鎖国状態となる。政変直前に実施された故渡辺仁博士によるラオス調査（1974年実施、東京大学総合研究博物館所蔵）や、天理教によるラオス伝道と巡回医療隊派遣（1970～78年実施）にまつわる資料は、政変直前の状況を知る上で貴重な資料となるだろう。さらにラオスへの外国人入国が解禁となった直後に国立民族学博物館によるラオス資料収集調査（1989～90年）が実施されている。1990年代後半には鹿児島県歴史資料センター黎明館の川野和明氏による収集調査および奄美大島の原野農芸博物館による収集調査が精力的に行われている。また、上記にあげた活動に関して言えば、モノだけに限らず、写真、動画、紀行文、研究論文からフィールドノートなど、さまざまな関連情報が残されている。上記に挙げた調査研究の遺産たる博物館コレクションを、プロジェクトのもとで実施されるフィールドワーク調査地それぞれの現状を時間的・空間的に関連づけ、同地域の生態史の動態を把握するための指標として扱っていきたいと考える。

上記の先行学術調査の動向は、国内博物館の収蔵資料情報を調査収集しつつ、モノの背景を検討していくなかで得た知見でもある。モノと情報班では、こうした博物館収蔵資料の情報収集からはじめ、関連資料の所在調査とともに、関係博物館所蔵のモノの分析や収集活動の背景を検討する作業へと活動内容を広げてきた。同時に、個別のモノに埋め込まれた情報を引き出し複眼的に精査していくためには、モノそのものへの理解を深め、モノへの視点を鍛える必要があると考え「道具の検討会」等の研究会も実施してきた。こうした活動は次年度も継続していくが、次年度では、さらにモノのもつ情報を補完し、充実するうえで、文献資料情報およびフィールド調査によるデータを組み合わせて、データベース化していく作業を目指す。モノの製作年代、収集時期や文献の記載時期が異なる上に、対象とするのが東南アジア大陸部の多くの少数民族であることを勘案し、時間軸と空間軸を変換しながら検索可能なデータベース「生態誌アーカイブズ」を策定することが本班の中心的な課題であり最終目標となる。

もともと、モノと情報班が扱うモノは、さまざまな博物館に分散しているため、モノの調査や分析・検討には、資料を所蔵する博物館との協力・連携が不可欠である。また、本研究の成果となるデータベースは、生態史プロジェクトによるフィールド調査のみならず、関係資料を所蔵する博物館との共同研究と協力連携の上ではじめて実現する成果でもあるため、関係博物館それぞれにとって、所蔵資料の新しい利活用にも寄与できるような、共有データベースとしての「生態誌アーカイブズ」の構築を構想している。

（文責：田口理恵）

2. 活動経過と次年度の予定

今年度のモノと情報班の活動は、＜博物館コレクション調査＞、＜ワーキング・セミナーの実施＞、＜フィールドワークとのインターアクション準備＞と、大きく3つにその内容をまとめることができる。以下では、それぞれの軸について、今年度の活動内容概要と次年度の予定について述べていく。なお、以下の2章の2]節は田口の、4]節は久保の個人報告の代わりでもある。2]節および3]節は、田口、清水が共同でまとめた内容となる。以下の2-2節ではワーキング・セミナーの実施経過のみを報告しており、研究会での議論やそこからの展望等については、別途、清水が個人報告（活動報告1）のなかで論じているので、そちらを参照されたい。

1] 博物館コレクション調査³

メコン河流域で収集された生業道具を所蔵する博物館にあたり、博物館標本台帳データ等、所蔵品に関する基礎情報を入手。その後は、収蔵品の基礎情報から関連する資料情報を取り出し、モノ情報の整理と分析などの手順で作業を進めてきた。

博物館コレクション調査は、まずは国立民族学博物館資料から着手し、上記の手順で作業を進めながら、民博以外にどんな博物館があるかを調べ、対象博物館を広げていったことになる。以下では、博物館コレクション調査で対象とした対象博物館の資料および情報整理作業の進捗状況を述べ、続いてこれらの博物館資料を扱う意義、

問題点等をまとめる。

(1) 博物館コレクション

【国立民族学博物館】

国立民族学博物館には、タイ 5093 点、ラオス 1103 点と、雲南 1017 点と、プロジェクト関連地域で収集された標本資料がある。膨大なタイ資料から手がけるよりも、森林班、医学班、ズブズブ班の調査地がラオスをメインとすることから、博物館コレクションのモノ情報整理の手順の模索とモデル作りも兼ねて、ラオス資料を中心に扱うことにした。

作業経過について簡単に説明する。民博より博物館収蔵品台帳のラオス資料分をコピーし、さらに KWIC データをいただいた。総数 1103 点と数えられるラオス収集資料も、その内容を見ていくと、収集地や現地名がわかるもの、そうでないもの（例えば、業者経由で購入、寄贈等々）など、標本資料に付された情報には偏りがある。台帳に記録されたモノの情報を確認していくと、【03-014】シリーズの 530 点、【02-026】シリーズの 94 点、【C50-174】シリーズの 97 点のみが使えるものとして残った。この 3 つのシリーズに属する資料は合計 719 点となるが、そこから布資料を除いた生業道具約 500 点を分析対象候補とした。

さらに、同じ用途の道具として括られるもので、標本数も比較多く、ラオス各地から集められているものが、カゴ類、漁具類、狩猟道具、刃のある道具（利器）類となり、その総数は 366 点となる。これらの道具類は、農業、漁業、狩猟等の活動で、生物資源の採集に利用され、あるいは採集した資源の運搬、加工に利用されるモノともいえ、相互に関連した道具のカテゴリーと捉えることもできる。カゴ類、漁具類、狩猟道具、利器と、これら 4 つの道具のグループについては、「道具の検討会」にてそれぞれを取り上げ、いかに見るべきか、これまでにどんな視点からどのような研究がなされてきたのかなどを検討してきた。「道具の検討会」実施前には、取り上げる道具グループに属する全資料を、民博収蔵庫にて実際に点検、観察、検討する機会をもった。

さて【03-014】、【02-026】、【C50-174】⁴の 3 つのシリーズだが、【03-014】シリーズは平成 3 年（1991 年）に標本登録されたもので、1989 年から 2 回計画で実施された収集調査の成果となる。ラオスが外国人解禁となった直後に行われた収集調査であり、常にモノは 2 対で集め、ワンセットを民博、ワンセットをラオス国立博物館に納めてきたという。

【02-026】は平成 2 年登録のもので、現地エージェントからコレクション購入したものである。【C50-174】シリーズは昭和 50 年（1975 年）登録の資料だが、実際は日本民族学会の前身である日本民族学協会時代に収集された資料となる。民博設置に伴い、日本民族学協会附属博物館から文部省資料館に移管され、そこから民博に移管された経緯を持つ。このシリーズに属するラオス資料は、日本民族学協会によって 1957～58 年に実施された第一次東南アジア稲作民族文化総合調査団の成果に関連したものとなる。

東南アジア稲作民族文化総合調査は、1954 年に協会創設 20 周年を迎えた日本民族学協会が、その記念事業として企画したものである。第一次調査は 1957 年 8 月から約 8 ヶ月でベトナム、カンボジア、ラオス、タイを舞台に、第二次調査は 1960 年 2 月から約 3 ヶ月で東部ジャワ、バリ島、ロンボク島に、第三次調査は 1963 年 6 月から約 10 ヶ月で、中部インドやネパールに調査隊を送り出したとされる [伊藤 1988: 297]。

旅行記『メコン紀行：民族の源流をたずねて』にまとめられた、東南アジア稲作民族文化総合調査（以下では、稲作調査団と略す）の第一次調査団によるタイ、カンボジア、ラオス調査は、松本信弘を団長とし、農学から浜田秀男、長重九の参加も得て、言語学（浅井恵倫）、民族学（河部利夫、岩田慶治、綾部恒雄）、考古・歴史学（清水潤三、江坂輝弥）、技術文化（八幡一郎）の専門家が参加している。さらに讀賣新聞報道班と映画班が同行し、現地では和田格（医師）、石井米雄（外務省）などが参加している。

民博には稲作調査団の関係資料として、モノだけでなく写真資料も所蔵されていることがわかった。写真ネガ特別収蔵庫には日本民族学協会コレクションとして 7661 枚の写真が死蔵されており、そのうち第一次稲作調査団による写真は 2535 枚となる。写真資料は、台紙に写真を貼り付けたもので、撮影日時、撮影者、撮影場所、写真タイトルもしくは撮影対象に関する説明等が記されている。とはいうものの、台紙ごとに記載内容にばらつきがあり、撮影者によっては撮影日時が月のみであったり、撮影場所も国名のみものから村の名前まで記されているものもある。撮影場所等が不明な写真を除くとタイ 786 枚、カンボジア 786 枚、ラオス 955 枚となる。

非常に貴重な資料のため特別収蔵庫からの持ち出しができず、一枚一枚を台紙ごとデジカメで撮影し、その画像をもとに台帳情報をエクセル入力し、写真リストを作成するという作業手順をとった。しかしこの段階では、被写体に関する情報にばらつきがあり、一覧データとしては不備事項も多く使えない。今後は調査団メンバーによる研究報告や、動画、その他関連資料の情報を参照しつつ、関係者への聞き取りもあわせて、情報の穴埋めと、補足情報を追記していくことで、データとして精微していく予定である。実際に、第一次稲作調査団による採集資料品目を見る⁵と、タイ資料 199 点、ラオス資料 72 点、カンボジア資料 25 点とある。民博【C50-174】シリーズのラオス資料 97 点には、稲作調査団として収集した資料のみならず、調査団メンバー個人による収集品で、後に民族学協会附属博物館に寄贈されたものや、もしくは、ほぼ同時期に実施された市立大調査による成果が紛れている可能性もある。

関連資料の所在等を調べていくと、稲作調査団に同行した読売新聞映像部製作の記録映画『民族の河メコン』は読売映像に保管されていることがわかった。記録映画（複製）はすでに入手済みである。さらに編集前のネガフィルムも入手できれば、モノ、写真資料の背景について、より詳細な資料検討が可能になるだろう。

稲作調査団送りだし当時の状況を知る手がかりとなるのが日本民族学協会事務局関係資料であり、現在、神奈川大・日本常民文化研究所に保管されている。同協会事務局関係の文書資料の現物は、日本民族学振興会の解散に伴って日本常民文化研究所に移管された。ただし日本民族学会事務局は、移管前に事務局関係資料の内容を整理し、デジカメで撮影し、デジタル資料として保管しているとのことである。

さらにつけ加えるならば、第一次稲作調査団に参加した浜田氏が現地採集した稲の品種 1200 種の全サンプルを、佐藤洋一郎氏が所持している。

【原野農芸博物館】

原野農芸博物館の収蔵品目録〔原野農芸博物館 2000〕を見ると、タイ 1176 件、ラオス 1125 件、ベトナム 406 件、ビルマ 168 件と、民博に勝るとも劣らない豊富な資料を所蔵していることがわかる。原野農芸博物館については、8月に大西が視察に出かけ、その折に収蔵品カード形式のデジタル・データ資料をいただいた。民博のラオス・モノデータとあわせていくことも考えて、収蔵品カード形式のデータをエクセルに入力しなおし、原野農芸博物館収蔵品リストを作成した。3月にはモノと情報班メンバーで、原野農芸博物館に赴き、展示場や収蔵庫にて収集資料を直接観察し、収集に関わった関係者からの聞き取り等を行った。原野農芸博物館の沿革やコレクションの背景・意義等については小島摩文報告に譲る。

日本、東南アジアからオセアニアまでと、農業、生業道具資料を積極的に集めてきた原野農芸博物館では、1995年よりラオスでの収集調査をはじめている。1996年までは北部を中心に、1997年より南部へ、その後はさらに国境を越えてベトナムや雲南へと、収集の対象地を広げている。原野農芸博物館による収集調査旅行には、1996年から川野氏も合流しており、川野コレクションの収集地と重なる部分もある。

【鹿児島黎明館保管の川野和明コレクション】

川野和明氏は、東南アジア大陸部での調査収集活動を 1996 年より始めた。今年度 12～1 月のラオス調査は、川野氏にとって 7 回目の調査となる。1996 年よりこれまで、ラオス北部を中心に中国国境付近、ベトナムと回り、実に 600 点以上におよぶ生業道具関係の資料を収集してきている。川野コレクションは、黎明館収蔵庫に保管されているものの、あくまでも個人のコレクションである。標本台帳の作成等まで手が回らないこともあり、資料情報の整理は十分ではない。モノと情報班では川野コレクションのデータ化に向け、まずは標本に付されたタグ（モノ情報のメモ書き）をもとに、台帳的な基礎リストを作成するために、黎明館にてコレクションの点検、観察、撮影等の作業を行った。次年度では、ベタ打ちされたタグ情報リストに対して、空欄を穴埋めし、モノ情報の捕捉等をしていくことで、台帳データとして整備し、川野コレクションのデータ化を進めていく。

川野コレクションの背景や意義は、橋村修報告および川野自身による個人報告に譲る。

【東京大学総合研究博物館の渡辺仁コレクション】

東京大学総合研究博物館には、渡辺仁氏（1919-1998 年）の研究業績資料があり、それらは渡辺氏が亡くな

った1998年に、ご遺族により同博物館に寄贈されたものである〔西秋 1999〕。そのうち、ラオス関係はスライド写真が293枚、フィールドノートや、科研書類等の文書資料および漁具実物3点がある。渡辺仁ラオス調査資料は、1974年（昭和49年）12月から翌年1月にかけて実施された「ラオス国考古学調査」の関係資料となる。

調査団（渡辺仁、重松和男、安斎正人からなり、現地から麗澤大学関係者および文部省考古学局のダラ氏等が参加）は12月8日にビエンチャン入りし、12月中はヴァンビエン（12月14日～21日）、ルアンプラバン（12月22日～29日）、年が明けて1月4日から11日まではタケク周辺の洞窟を回り遺跡調査を行っている〔安斎 1985〕。この間、渡辺は「土俗考古学（生態）の立場から、ヴァンビエン周辺の現生民族の一端について」観察・聞き取り調査も行っており、「ヴァンヴィエン地域は・・・野生動植物の採集活動（狩猟、漁撈、植物採集）の調査に適していること」⁶から、昭和51年度から先史考古学（発掘調査）と土俗考古学（生態調査）による本格的な調査の実施を計画していた。

調査計画書によれば、昭和51年度からの本格的調査は、10人（渡辺仁代表、重松和男、大塚柳太郎、安斎正人、五十嵐忠孝、口蔵幸雄、鷹野光行、新田英治、プラシット・スーリサク、ダラ・フォームスーヴァン）で組織され、第一回調査（昭和51年8月10～52年1月23日まで）から、56年度までに3度の海外調査を実施する長期調査計画を予定していた。ところが、ラオスの政変により調査計画そのものを断念せざるをえなくなったという経緯をもつ。

渡辺仁資料については、12月に田口がスライド写真のスキャナーでデジタル化し、また写真のリストを作成。同時に事務関係書類の内容を調査し、文書の一部コピーと事務関係書類リストを作成した。組み立て式漁具3点の実測・撮影は次年度に実施する。またスライド写真も、フィールドノート等とあわせながら、撮影場所の特定、内容等を詳査していく必要がある。なお、渡辺仁氏の土俗考古学への視点、意義等は後藤明の報告に譲る。

【天理大学附属天理参考館】

天理大学附属参考館では、基本的に標本管理は標本カードと台帳によってなされている。地域によって、台帳およびカード情報がデジタル・データ化されているところもあるが、東南アジア大陸部資料についてはなされていない。12月に清水、田口、大西が参考館に赴き、吉田の協力のもと、1986年までの資料について、台帳から東南アジア大陸部関係の部分ピックアップしていく作業を行った。つまり台帳は、参考館に搬入され登録された順に資料情報が書き込まれているからである。1月に再度赴き、付箋をした大陸部関係部分をコピーし、それをもとに記載事項をエクセル入力し、大陸部資料リストを作成する作業を行った。

特に1986年までに登録された東南アジア大陸部資料は全部で768点あり、ラオス資料は35点、タイ576点となる。49点あるカンボジア資料には、第三次大阪市立大（カンボジア）調査団（石井健一代表）収集の、農具に関係した道具資料35点が含まれている。

ラオス資料35点には、1958年に岩田慶治氏から得た2点や、1965年10月27日登録の8点および1968年4月登録の4点など、名古屋教会長森井敏晴氏寄贈のものが含まれる。森井氏は1969年6月、1975年4月にもラオス資料を参考館に寄贈している。この森井氏が、1975年1月からの3ヶ月におよぶラオス巡回医療隊（第一次）の派遣を橋渡し、同年9月にはラオス王国宗教省より「布教許可」を得て実施された天理教ラオス伝道を指揮した中心的人物でもある。参考館所蔵コレクションの概要や、70年代の天理教ラオス伝道の概略やその関係資料およびラオス伝道の意義等は吉田裕彦の報告に譲る。

【その他】

以上のほか、1969年～1974年に実施された上智大西北タイ歴史文化調査団（白鳥調査団、第一次～第四次）の成果となるコレクションが南山大学人類学博物館にある。このコレクションは、2000年に上智大・量研究室から南山大学人類学博物館に寄贈されたもので、モノ、写真、動画から構成される。しかし、未だ十分な資料整理が進んでおらず、資料活用での協力・協同をお願いできる状態にはない。

次年度では、これまで作成してきた博物館コレクションごとのモノの基礎データ⁷を整備していく。博物館ご

とにモノの分類等が異なるため（表-1を参照）、標本情報管理の様式を調整しながら、分類項目を再編成しつつ、一つのモノデータとしてまとめていく作業を進める。そこでは、写真・映像、フィールドノート、文献資料情報等の関連資料を精査し、資料間相互の関連性を明らかにしつつ、さらに関係者からの聞き取りを組み合わせ、モノ（および写真）のもつ情報を補完し充実をはかっていく。

表-1：「モノと情報」班で扱う博物館資料（モノ・写真）

	対象博物館	雲南	ラオス					タイ	カンボジア	ベトナム	ビルマ
モノ資料	(編作)		(197)					(219)	?	?	
	民博	1017	1103					5003			
	(林資料)		カゴ	刀物	漆器	竹	銅				
			117	119	43	47	727				
原野調査		185	199	122	34	308	1176		406	164	
		1125									
天理参考館	19		35 (38)					576 (573)	49	13	66
写真	編作写真		955					786	786	8	
	渡辺仁写真		293								

注) 民博モノ資料のなかで、収集時期が古いものは、雲南関係が、鳥居龍三収集の2点 (C50-519)、ラオス資料は日本民族学協会＝編作調査団 (C50-174)、タイ資料の場合、EMS による佐々木高明 (C49-007) や石毛直道 (C50-026) 収集、編作調査団 (C50-174) などとなる。

以上に述べた収集調査それぞれの踏査地と行程については、清水が資料化を進めてきた。今後は関連資料からの情報とつぎあわせつつ、踏査地の詳細を明らかにしていく。さらに、調査行程およびモノの収集場所に関する情報を、メコン GIS を活用しつつ、地図上におとしていくことで、モノの収集地分布を示す地図資料を作成することを予定している。同時にメコン河流域地域全体の各種地図を広く集め、既存地図の利点、問題等、地図資料情報の活用を検討しつつ、生態史プロジェクトのフィールド調査拠点を、モノ分布地図にマッピングしていけるような、時間と空間の表現に配慮したデータベースの作成準備を進める。

モノデータとモノ分布地図からなるモノのデータベースは、生態史プロジェクト内で共有できる基礎的データベースであり、フィールドツールとしても活用しうるものになるよう構想している。このモノのデータベースに対して抱くイメージは、渋沢の言葉を引用することで説明にかえたい。渋沢敬三が「絵引きは作れぬものか」と構想し、編集を試みた絵引きの意義を以下のように述べている。「この仕事は民俗学の中でもマテリアルカルチャの資料として、クロノロジーを明らかにし、文章のみでは解りにくい面をはっきりさせる点でも誰でもいいから一度は完成しておくで後から勉強する方々の助けになると思う。」[澁澤 1984 (1954) : viii - ix]。

モノのデータベース自体の完成は、生態史プロジェクトの3つの研究軸からみれば、その専門分野内での最先端の成果に直接的に寄与するものではないだろう。また各班メンバー個々にとっても、即効の業績生産につながらないかもしれない。が、しかし、プロジェクトメンバーが、フィールド調査にて個々の研究対象・テーマを掘り下げていくときに、いったん視点をかえて眼前の対象をちがった視点から見直すようなきっかけに利用してもらえるような、思い思いに意味を引き出すような共有データになればと考える。そのためにも、モノ情報のデータベース化では、様々な専門（地域文化、人類学、地理学、生態学、農学など）や生態史プロジェクトの研究軸からみて重要となるインデックスや視点も取り入れつつ、モノのデータを精査していく準備作業を進めていきたいと考える。

(2) 博物館コレクションのコレクション

モノと情報班が扱う上記の博物館コレクションは、上述の通り、1950年代末、1970年代、1990年代に、

表-2 モノから探るラオス60年間の変化

ラオスでの学術調査、研究活動など		資料の所在地 (博物館)	
●東南アジア稲作民族文化総合調査団 (1957～58年)	鎖 国 状 態 73-86	国立民族学博物館 モノ、写真	
●大阪府立大学調査 (1957～58年)		?	
●上野大西北タイ歴史・文化調査団 (1969～74年)		南山大学人類学博物館 モノ、写真、動画	
●天理教道祖伝承録・伝道活動 (1970～1978年)		天理参考館、関係者個人 による所蔵	
●暹羅(ラオス)調査 (1974年)		東京大学研究総合博物館 スライド、フィルム	
		●民博ラオス収集調査 (1989年～1990年)	国立民族学博物館 モノ
		●原野島立博物館収集調査 (1995～1997年)	原野島立博物館
		●川野氏ラオス調査 (1996～)	鹿兒島黎明館(川野個人)
		●生態史プロジェクト(～2005年)	

それぞれの学問的関心や背景をもって実施されたエクスペディション(学術調査)の成果であり遺産でもある。表-2に示すように、1957～58年の稲作調査団から生態史プロジェクトまでを並べれば、過去の収集資料は調査地の状況を時系列に沿って分析する上で、参考となる一つの指標を提供してくれる。つまり、1975～1980年代末までの政変に伴う鎖国状態の期間をはさみ、その以前と以後、およびプロジェクト進行中の現在と、時期を大きく3つにわけた場合に、上記の学術調査が残したモノは、それぞれの時期の時代状況に対し、われわれが想像し近接するための手がかりにすることができる⁸。ある時期にある場所で収集されたモノは、当時そこにあったのだということを示す。フィールド調査において、あいまいな内容に翻弄されつつも、彼/彼女の経験の蓄積と時間経過を推察していく際に、“当時そこにあったモノ”は、相手の記憶を引き出す手がかりとなる。その意味で、モノのデータベースは一つのフィールドツールとして利用することもできるのではないだろうか。

さらに、上記博物館コレクションのモノデータに対して、Pavie Mission(1879-95)などのフランス植民地時代になされたエクスペディションの関連資料を組み合わせれば、生態史プロジェクトが扱おうとする1945年から2005年までの時間の幅とその間での変化の動態を、インドシナ近現代史の流れの中に位置づけ、相対化するための視点を得ることにもつながるだろう。

上記の博物館コレクションを一まとまりの資料として扱う場合に、「そのモノは確かにそこにあった」という事実、モノの実在性を根拠とし、モノを時間指標あるいは空間指標として活用することが可能になる。以下では、博物館資料とその関連情報を集めてきた過程で見えてきた、上記コレクションの意義や問題について、2点のみを指摘しておきたい。

① 稲作調査団から生態史プロジェクトまで

モノに刻まれた多様な履歴には、モノが作り出され使われてきた、フィールドにおける人と自然環境の相互作用の痕跡という側面と、それぞれのモノが博物館におさまるまでに辿ってきた経緯という側面とがある。特にここでは後者の側面から博物館コレクションおよび関連資料を扱う問題と意義について考える。

モノの移動とその経緯が最も複雑な例が民博の【C50-174】シリーズとなる。先に述べた通り同シリーズのモノは、日本民族学協会時代に収集された日本民族学協会附属博物館の収蔵資料だったが、それが民博設置に伴い、いったん文部省資料館に移管され、そこから民博に移管されたという経緯を持つ⁹。さらに日本民族学振興会の解散とともに、日本民族学協会および振興会の事務局関係文書は、現物が常民研に移管され、デジタル版が日本民族学協会事務局に保管されることになった。現在、日本民族学協会に関わる諸資料は、複数の研究機関に分散した形で保管されているが、移管を繰り返したことで、移管の経緯や権利関係が不透明となり、それぞれの所

蔵先では扱いの難しい問題資料となっている。博物館コレクションとなったモノの履歴を探るということは、このように、モノの移動過程に関わった人々や、関係者がとった対応の一つ一つを辿り、絡み合った糸をほぐしていく作業でもある。

対象とする博物館コレクションについて、収集に関わった人について見てみよう。第一次稲作調査団のメンバーは、松本信弘、浜田秀男、長重九、浅井恵倫、河部利夫、岩田慶治、綾部恒雄、清水潤三、江坂輝弥、八幡一郎からなり、讀賣新聞報道班と映画班メンバーに加え、現地から和田格、石井米雄などが参加している。この第一次稲作調査団派遣当時の資料を見ると、日本民族学協会は東南アジア稲作民族文化総合調査委員会を組織して記念事業を進めたことがわかる。その委員長には岡正雄、幹事に馬渕東一、白鳥芳郎、河部利夫、松本信弘、浅井恵倫、八幡一郎、岡正雄、宮本延人、西村朝日太郎、山本達朗、蒲生正雄、委員には古野清人、牧野翼、盛永俊太郎、今西錦司、浜田秀男、岩田慶治、須田昭義、川喜多二郎などが名を連ねている。また調査団東京事務局は、上智大学白鳥教授研究室に置かれていた。当時の民族学協会は、協会役員に渋沢敬三、理事長が岡正雄、理事を松本信弘、浅井恵倫、八幡一郎、須田昭義らが務めており、第一次稲作調査団には、当時の日本民族学のお歴々がメンバーとして参加していることがわかる。また、渋沢敬三は稲作調査団の後援会会長にもなり、広く財界から寄付を募って稲作調査事業をサポートし、文部省からの補助金 4,000,000 円に加えて、寄付金 13,668,240 円（予定額？）の規模で実施された。

稲作調査団が文部省の補助金を得て、すでに外貨割り当てを受けていたこともあり、ほぼ同時期に調査を計画していた大阪市大学東南アジア学術調査隊は、「一日四ドル、百日分」の外貨割り当てしか得られなかった。同調査隊の隊長をつとめた梅棹初代民博館長による調査紀行『東南アジア紀行』[梅棹 1979]を読むと、稲作調査団をライバル視するような複雑な心境が見え隠れする。この大阪市大東南アジア学術調査隊は、1957-58年の第一次調査では梅棹忠夫を隊長に、小川房人、依田恭二（植物生態学）、川村俊蔵（テナガザル）、吉川公雄（ハチ）、藤岡喜愛（人類学）からなり、現地から石井米雄らが参加している。1961年からの第二次調査では岩田慶治を隊長とし、小川、依田、荻野（森林研究）、松岡（栽培植物学）、今立（昆虫学）に、四手井網英、吉良竜夫が参加している。さらに地質学の石井健二を団長に第三次調査隊としてカンボジア調査が実施されている。

第一次稲作調査と市大学術調査の双方に、岩田慶治と石井米雄が関わっている。また、稲作調査団の東京事務局を務めた白鳥芳郎は、1967～74年と4次に渡って実施された上智大西北タイ歴史文化調査¹⁰を組織し、そこには稲作調査団のメンバーでもあった八幡一郎も参加している。単純にそれぞれの学術調査について参加者名のみを取り出すだけでも、モノと情報班で扱う博物館コレクション同士に、なにがしかの関連性や重なり、連続性を見出すことができる。より詳細を確かめていかなければならないが、関係資料を散見すると、稲作調査団と市大隊に参加した岩田慶治が個人として収集したモノには、天理参考館に渡った2点の他、日本民族学協会に買い上げられて附属博物館資料となり、そして民博資料におさまったものもあるようだ。また、市大隊カンボジア調査での収集品は天理参考館に所蔵されている。

蛇足として、人のつながりから博物館コレクションと生態史プロジェクトとのつながりをこじつければ、1974年のラオス国考古学調査を指揮した渡辺仁は、プロジェクト・リーダー秋道の大学院時代の指導教官でもある。また天理教ラオス巡回医療団で1972年の第4次から、第5次、第6次と、第8次（1976年）の隊長医師を務めた天野博之医師の長年の活動が、人類生態班によるラオス調査の礎にもなっているというのは言い過ぎだろうか。吉田報告が述べるように、天理教が1970年代に開始したラオスでの巡回医療活動の意義は、ラオスもしくは東南アジアでの国際医療援助の歴史¹¹とあわせて、「人類生態」班のかたがたにお教えいただければと考える。

博物館コレクションを通して、上記にあげた稲作調査団からの先行学術調査を眺めると、生態学、農学、医学、地理学、民族・人類学などが集まり、総合的な取り組みを目指した当時のフィールドワークに対する熱意と、それぞれの専門分野に細分化していくその後の過程とを改めて考えさせられる。こうしたモノや人の重なり、つながりを踏まえると、稲作調査団からの先行の学術調査は、＜人と環境の相互作用＞の総合的理解を目指した学際的な取り組みの流れとして見直すこともできるだろう。生態史プロジェクトもまた、その連続の中に位置づけることができる。特に、生態史プロジェクトと類似した分野構成からなる稲作調査団の遺産は、日本民族学協会時代の民族学の再検討、日本の東南アジア研究の展開や学際的研究調査のあり方などを考える上でも重要な資料・史料となる。

「持続的発展」「環境資源の持続的利用」が声高に強調されるほど、そのことを主張する研究者サイドに、問題関心や研究体制の持続性や、研究データと成果の「持続的発展」は果してあるのだろうかと考えさせられる。稲作調査団から生態史プロジェクトまでの連続性を意識することは、これまでになされてきた研究者の営みとその蓄積から、われわれは何を引きつぎ、受け継いできたのか、そして、現在の取り組みをこの先どのように持続させ発展させていくのかを自問する契機にもなるだろう。

② Diffusion と Region

次に、「モノはそこにあった」というモノの存在性を根拠とし、その情報を集積させ空間的に捉える、“モノの分布”を見ることの可能性について考えてみたい。

図-1は民博林収集資料の釜の収集地をラオス地図に落としたものである。1989～90年のラオス収集調査では、町で買い集めるのではなく、村の情報を得て、そこまででかけ、数日滞在しながら使われている道具類を収集していくという方法をとったという。収集を担当した林行夫氏によれば、ラオス南部での収集では、主にモン・クメール系の村を訪れ、

また、他には見られない、その場所で特徴的なモノを集めたという。それぞれの収集地で特徴的なモノということで、釜のみでも、それらを県別ではあれ実際に地図に落としてみれば、魚をとるために使われる道具が、いかに場所によって違うのかという多様性が明らかになる。と同時に、実際に現物を手にとって見ると、サイズの大小はあっても道具の構成（素材の組み立て方）自体が似ているものあり、そこから共通した製作加工技術の、複数の地域での利用と分布として考えることもできるだろう。つまり、モノの分布図によって、われわれはモノの地域差と多様性を同時に見渡すことができる。同時に、モノそのものに対する疑問・問題関心も果てしなくひろがっていく。

例えば、ワーキング・セミナー（道具の検討会「漁具の会」）でも確認され、また秋道が強調したように¹²、釜の多様性の背景として、それぞれの釜がどこに設置されて、どのように用いられているのかを考えなくていけないだろう。設置場所は、メコン河の本流、支流なのか、あるいは水田、水路、川沿い、流水か泥に差し込むの



図-1：民博釜資料の収集地（作業用メモ、田口作成）

か、雨季のみ、乾季のみの使用か、通年で用いられるものか、そしてその道具で採る魚の種類と生態はどうなのか、などである。素材で用いる植物（竹）の利用でも同様のことが言えるだろう。水田での罟設置ならば、田んぼの所有者は、獲った魚の所有者の問題はどうなっているのか。仮に使用時期や使用期間に伴う道具の耐久性や消耗の問題から、取替えのサイクル、修繕、保管の方法はどうなっているのか。自家製なのか、商品なのか。素材はどのように入手されるのか。あるいは資源の商品化に伴い、捕る量や人が増えたり、鮮魚を運ぶために道具の利用量が増える、巨大化するとか、代替品（バケツ、ポリタンク、発泡スチロール製の容器など）の登場など、利用面での変化があるかもしれない。



写真－1



写真－2

民博罟資料の中で、サバナケット収集のネズミ捕りのような道具サンプルについて取り上げてみたい。竹と木の板で作られた小型の罟（写真－1を参照）は、台帳によればラオ語で“CHUN”と呼ばれるものである。ラオスの漁具の多様性を扱った図説によれば、魚が入るとドアが落ちるタイプの罟を jun (drop-door traps, ラオ・ルム使用) としており、それには、幅 1 m×長さ 2 m から 60 cm×長さ 1.3 m 位までの竹で編んだ枠に、ネットがけたした巨大なタイプのものと、幅 20 cm×高さ 20 cm×長さ 40 cm ほどの木製箱型のもがあるという。そして後者のタイプは、カムムアン県近辺で使用されるものという [Claridge, Sorangkhou and Baird 1997:41-44]。民博のサンプルと同じものが対岸のタイ側でもよく見られるといい、また巨大化したタイプのものがメコン河岸に並べられているのを、昨 12 月ビエンチャンにて目撃した（写真－2を参照）。この巨大タイプのものは、昨年 11 月に北タイ・イン川流域での利用も観察されている。この場合、ラオス出身の住民がラオスより取り寄せて使用していたとのことである。

モノの分布図は、収集地からかけ離れた場所、予期せぬ場所での、同じタイプの道具利用の発見から、さらにその利用実態や背景を知る手がかりになるだろう。モノの分布資料情報を現実に照らした際、むしろギャップばかりが目立つだろう。しかし、それらのギャップは、微妙で些細な地域差と多様性のほかに、道具利用にみる季節性や、モノの移動を生み

出す人・社会的要因を追求していくきっかけにもなる。さらに、個別ローカルな一点で考えれば、ある道具が一体どんなモノとセットになって使われているのか、あるいは、あるタイプの罟が特定期間しか使用されないのならば、それ以外の時期に人々はどんな活動を行っているのか、通年で見た生業複合のなかで、どのような道具がいっしょに利用されるのかなど、好奇心は広がっていく。個別のモノを扱う場合、そのモノを位置づけるために、いっしょに利用される道具複合とその全体を、地域比較もあわせて考えていく必要もあるだろう。

モノの分布を考えることは何も新しいことではない。むしろ古い伝統がある。しかし、従来の物質文化研究が、人類史のなかの文化史解明という関心をもとに展開してきたこともあり、それを跡付けるために取り上げられるモノ・対象は少なく、しかもモノ自体を細かくみてこなかったという問題を含んでいる。そのために、モノの分布を見るための網の目（文化項目）をより細かくしようとする試みもなされてきた。その代表的な試みとして、HRAF の文化項目や文化クラスター研究をあげることができるだろう。

文化クラスター研究は、昭和 56 年（1981）～59 年（1984）に実施された民博共同研究の成果でもあり、1988 年からのデータ入力作業を経て、1990 年に刊行される [大林太良、杉田繁治、秋道智彌編 1990]。ここでは、アジア、オセアニアという広域での文化比較を目標にしており、取り上げられた民族は 237（東南アジアで 138）で、当初 33 分野で 486 項目と挙げた比較の基準を、最終的に 27 の大項目と 343 の項目に絞り

込んだ成果でもある。ひろく民族誌にあたり、記述内容に該当する項目内容があるかないかをチェックしていった地道な作業の成果でもある。そこで設けられたインデックスは、モノだったり、その機能だったり、社会構造、親族関係、神話などの類型までと多岐に渡る。モノは文化要素として分析の対象にされたが、あくまで当該社会における文化要素の分布と要素間の機能的・非機能的関係の分析や系譜に焦点が当てられていた。表-3にまとめたように、例えば、カゴ類、狩猟具、漁具類や利器に関連しそうな事項を、文化クラスターの項目に照合させピックアップし、さらにラオスという枠をはめて考えれば、文化クラスターが提供してくれる分布情報は、実はほとんど意味をなさない。それでも、モノと分布を見ることは、個別ローカルなフィールドを越えて、分布から見える地域間のつながりや、モノの移動から見える広がりの中の一点として、フィールド調査地をいろいろな角度から見渡せる縦横な視点の重要さと楽しさを教えてくれる。

(文責：田口理恵)

2] ワーキング・セミナー

これまで「モノと情報」班では、モノそのものへの視点を鍛え、具体的な調査方法やモノ研究の可能性を議論するための機会として、ワーキング・セミナーを実施してきた。ワーキング・セミナーのなかでも、「道具の検討会」と称する研究会は、モノについての理解を深めることを目的に、環境と人間の相互作用に介在する道具・モノとして、特にカゴ、刃物、漁具、狩猟具を中心に持ち上げ、それらの道具を多角的に検討してきた。「資料検討会」は、コレクションの背景（時代状況、学史的意義等）の検討から、モノが使われる地域文化、地域社会の文脈理解を深める機会、或いは撮影・実測等の作業とともに、モノ班メンバーが実際に収蔵庫にてモノを見ながら、観察・検討する機会として実施してきた。次年度も引き続き、ワーキング・セミナーを定期的実施していく予定である。

具体的な実施経過や研究会での報告者などは下記に挙げる通りである。ワーキングセミナーの議論から得られた知見や、確認された可能性の広がり、問題意識等の詳細は、清水報告および、モノと情報班メンバーの個人報告のなかでも、直接・間接に触れられているので、そちらを参照されたい。

「モノと情報」班ワーキングセミナーの実施経過

(道具の検討会、研究打ち合せ会議、博物館資料の实地の見学を合わせた資料検討会、その他を含む)

7月14日 道具の検討会「漁具の会」

<報告者およびタイトル>

秋道智彌「モノとしての漁具研究の可能性」

後藤明「釣り針、筥に見る使用時や製作者の創意工夫—モノ収集時の注意事項として—」

橋村修「漁具・漁法へのまなざしのメモ—モノを通じて歴史をみる—」

10月3日 道具の検討会「カゴの会」+稲作調査団記録映画上映会

<報告者およびタイトル>

秋道智彌(挨拶)「生態史プロジェクトにおけるモノと情報班の位置づけ」

田口理恵「モノと情報班で扱う博物館標本資料」、

「記録映画『民族の河メコン』の資料的位置づけ」

川野和昭「(竹の世界—カゴ類コレクションの資料解説)」

11月5日 道具の検討会「利器の会(1)」(穂摘み具の会の準備)

<報告者およびタイトル>

大西秀之「(鎌と穂摘み具、考古学的な利器の検討ポイント)」

清水郁郎「北タイの山地で使用される利器—とくにアカの建設道具について—」

木村裕樹「木地挽体験—技能習得の実践を通してみた木地挽職人の技能に関する若干の覚書—」

11月12日 道具の検討会「利器の会(2)」

<報告者およびタイトル>

清水郁郎「モノへの視点—民博資料から：とくに刃物に関して」

大西秀之「鎌と穂摘み具—機能論的視点から」

川野和昭「(穂摘み具コレクションの提示と、資料解説)」

佐藤洋一郎「ラオス調査報告(稲の品種と特性の解説と、ビデオ映像)」

11月14日 研究報告、於『名古屋タイ・雲南研究会』

田口理恵「東南アジア稲作民族文化総合調査関連資料再活用の可能性」

11月26日 資料検討会

「タイ北部山地民社会からみた東南アジア稲作民族文化総合調査関連資料の多角的分析」(コーディネーター：清水郁郎)

<報告者およびタイトル>

田口理恵(挨拶)「モノと情報班の活動説明と、東南アジア稲作民族文化総合調査関連資料の解説」

清水郁郎「タイ社会研究および北タイ山地社会研究を踏まえたモノ研究の視点について」片岡樹「タイ国のラフ文化についての背景知識：ラフの物質文化」

稲村務「ハニとアカ」

大島新人「語るモノ、語らないモノ、語られるモノ：モノにたいする視点に関する試論」

2月3～5日 川野コレクションの基礎データ収集、撮影、検討

参加者：川野和昭、田口理恵、清水郁郎、大西秀之、宮脇千絵

2月5日 モノと情報班・研究打ち合わせ会議

参加者：久保正敏、川野和昭、吉田裕彦、小島摩文、橋村修、田口理恵、清水郁郎、大西秀之、宮脇千絵

2月20～24日 海洋文化館所蔵・東南アジア関係資料の調査と検討会

参加者：秋道智彌、後藤明、田口理恵、山田仁志、角南聡一郎

2月20日 天理教名古屋大教会の森井敏晴氏への表敬訪問と懇談

参加者：吉田裕彦、久保正敏、西村雄一郎

2月28日 データベース研究会

「データベースとフィールドワーク・ツール」（コーディネーター：久保正敏&野中健一）

<報告者およびタイトル>

野中健一「フィールド情報の即時取得とデータベース化に関する研究」

西村雄一郎「天理教ラオス伝道に関する聞き取り」

田口理恵「資料紹介：遠藤庄治氏と沖縄国際大学・沖縄伝承話資料センターによる伝承話データベース」

参加者：久保正敏、野中健一、西村雄一郎、田口理恵、清水郁郎、橋村修

3月4～7日 原野農芸博物館での資料調査および研究打ち合わせ

参加者：川野和昭、後藤明、吉田裕彦、田口理恵、清水郁郎、大西秀之

3月26日 70年代天理教ラオス伝道の関係者（森井氏、金森氏、菅原氏）との懇談

参加者：秋道智彌、久保正敏、吉田裕彦、田口理恵、清水郁郎

3) フィールドワークとのインターアクション

モノと情報班にとってのフィールドワークとは、国内での博物館コレクション調査とラオスでのフィールド調査の二つを意図している。もっとも、今年度のモノと情報班は予算つきの正式な班ではなかったこともあり、川野和昭がラオス調査（12月～1月）を実施した以外は、国内博物館調査とワーキング・セミナーが活動の中心となった。次年度も引き続き国内博物館調査を実施していくが、これまでの活動のなかで深めてきた問題意識をもとに、モノと情報班メンバーによるラオス調査も計画している。

モノと情報班では、大陸部でのフィールド調査経験の差を踏まえて、メンバーによるラオス調査への関わりを大きく二つに分けている。

- ①広域トレース調査：関係博物館コレクションの背景理解を深めるとともに、収集調査当時の状況と現在との違いをはかり記録し資料化する。
- ②東南アジア大陸部での、これまでの調査経験と研究蓄積をもとに、その発展・延長として行うインテンシブ調査（清水、川野）。

また、博物館コレクションにあるモノを踏まえつつも、現地・現在でのモノの利用の実態理解を深める目的もあり、メンバーそれぞれが、個々の問題関心に依拠して調査の対象とするモノ（および関連事項）を絞り込んでおり、それをラオス調査での焦点であり各自の分担とする。もっとも、メンバー個々が取り上げるモノは、人々が日常生活のなかで用いるモノ・道具複合の一部でもある。したがって、特定のモノがある活動のなかで利用される際に、いっしょに用いられる道具類（モノの連鎖）、もしくは生活空間を占める道具類の全体（モノの複合）を捉える必要がある。生活空間を占めるモノ複合の全体を把握するために、現地での全品調査を構想している。次年度の現地調査は、モノ班メンバーによる共同調査（全品調査）を具体化するための準備期間とも考えている。国内調査を含めて、各メンバーの役割分担、問題関心等は上記の表-4にまとめた。個々の報告が、それぞれの問

表-4：モノと情報班メンバーと分担

		国内（博物館）	国外（ラオス調査）	
			トース	焦点となる道具・モノ
モノと情報班	久保正敏	民博、データベース	○	土産物
	川野和昭	川野コレクション		竹の焼畑
	後藤明	東大・渡辺仁	○	漁具を中心に製造技術、利用
	吉田裕彦	天理参考館	○	座るモノ（椅子などを中心に座ること）
	小島摩文	原野農芸博物館	○	馬具を中心に運搬の問題と交通
	橋村修	川野コレクション	○	漁具の利用と多様性
	田口理恵	民博（稲作・林）	○	竹製品（織道具、編みカゴ）の製造加工技術と製品の販売・流通
	清水郁郎	川野・原野農芸		家屋・建築
	宮脇千絵	研究補助、データベース		（雲南の民族衣装とエスニック・アイデンティティ）
医	大西秀之	（宮川・野中調査）	医学班	

題関心や研究展望等を踏まえたものとなるので、そちらを参照されたい。

4] フォーラム型のデジタル・アーカイブズとしての「生態誌アーカイブズ」

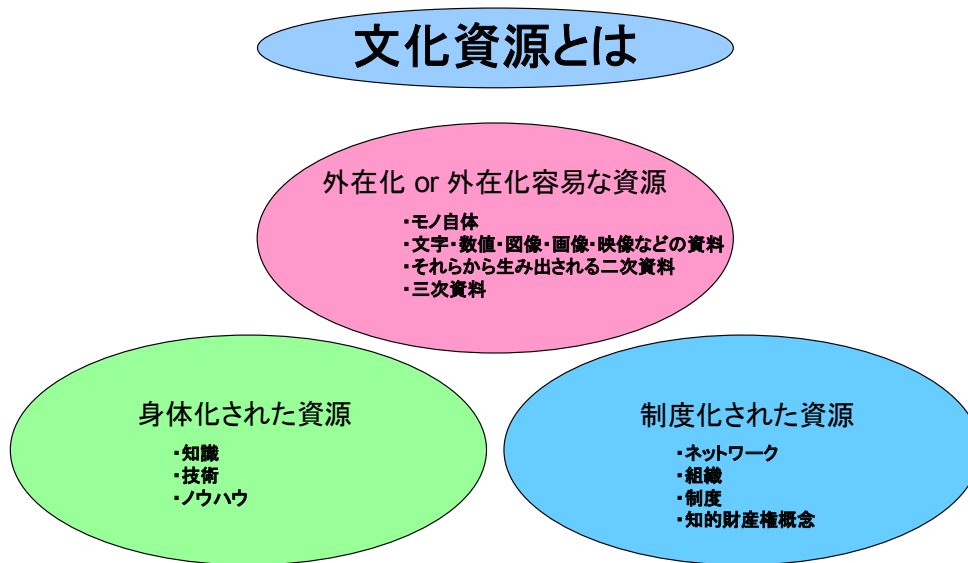
(1) 文化資源のアーカイブズ

国立民族学博物館をはじめとする各地の民族学・人類学系の博物館は、人類社会の多様性の発見とその知的遺産の継承をめざして研究を進めると同時に、民族誌資料・情報センターの役割も果たしてきた。収集されてきた民族誌資料の形態・種類は多岐にわたっている。モノ（生業用具、生活用具、儀礼用具、などの人工物）、写真、映像、音声・音響記録、フィールドノート、など、フィールドワーク途上での様々な記録や収集物が含まれ、表現メディア形態（文字、画像・映像、音声・音響）や情報の回数も様々である。

こうした資料類は、各文化に対する外からの理解だけでなく、内からの理解にも役立つ資料類であり、文化の継承・復興、あるいは創成にも寄与する資源と捉え直すことができ、その意味では、「文化資源」と呼ぶのがふさわしい。しかし、一旦文化資源と捉えなおすならば、上記に挙げたような有形の資源、あるいは外在化が容易な資源だけではなく、より広い対象を資源に含めることができると、我々は考えている。すなわち、個々人が持つ技術、知識、記憶、ノウハウなども、その文化成員に「身体化された文化資源」と見なすことができる（第2のカテゴリー）。さらには、個々人が持つ様々な人的ネットワークや組織、制度、概念なども、「制度化された文化資源」と言える（第3のカテゴリー）。例えば、知的財産権の概念について見れば、オーストラリア・アボリジニ文化においては、個人の顔を具象化したイメージや写真は、当人の死後、外部にさらすことが禁じられている。これは西欧流の「肖像権」とは異なる、宗教的な背景を持つ「文化人格権」と見なすことができよう。そこで我々は、文化資源として下図に示すような3つのカテゴリーを設定したい。

もっとも、第2、第3のカテゴリーの文化資源も、最終的には第1カテゴリーの外在化された資源に転換されることによって、理解や共有が容易となるのであり、第1カテゴリーの文化資源の重要性は言うまでもない。特に、文化資源自体を現地に保留する、あるいは所有権を現地に保留しつつ、文化資源の共有を図る上では、デ

デジタル化が欠かせない。これは、次に述べるような、研究倫理の転換が求められ、現地との共同化の推進が強く求められている現在、現地の権利確保と共有・活用の両者のバランスを図る最良の方法であろう。ここに、客体化された文化資源のデジタル・アーカイブズを構築する意義がある、と我々は考えている。



(2) フォーラム型のデジタル・アーカイブズ

他方で、文化人類学分野では、従来のような民族誌資料収集や記述に対する見直しが生まれ、J. クリフォードのように「文化を語ること」「文化を翻訳すること」とは何かを突き詰めて考える動きがある。従来の民族誌は、書き手とテキストを権威付けて客観性を謳うためのレトリックに満ちているが、そもそも客観的なテキストはあり得るのかという問題<1>、書き手と対象文化出身者の間には、政治的・経済的・文化的権力がもたらす非対称性（しばしば植民側が被植民側を記述する）が厳然と存在する点<2>、西欧言語という強い言語で口頭文化を文字化することによる固定化や権威化<3>、などを問いかける。ポスト構造主義と呼応し、既存の権威や、自己と他者の区分について脱構築を提唱するものと言える。

これは、民族誌記述に重点を置いた見直しだが、資料収集や取材、写真撮影についても同じ事が言え、特に<2>に関しては、資料の持ち去りや非現地語のみによる記述は、現地からは「文化の剥奪」と見なされても仕方がない状況である。こうした反省に立って、今後の資料収集や情報化の指針を打ち立てることが必要であろう。また、集積された資料数や情報量が膨大化した事態に対処するドキュメンテーションの方法論も確立せねばならない。

上記<1>、<2>の問題の解決方法の一つは、「共同性」の徹底であろう。<1>に対しては、「一次収集、一次記述とその後の参照・活用との間での共同性」の推進である。記述や収集はいずれも現実の切り取りの一つに過ぎず客観性を謳うことは無理だと認め、その代わりに、どの時点でも、収集や記述の責任は署名によって明確化されるべきことを前提とする共同性である。それに伴って、知的所有権保護や認証制度を充実させる必要がある。

<2>に関しては、「現地と非現地との間の共同性」を追求することが解決法の一つである。例えば、資料は現地に残し、それに関する記述を共同で行い、その結果の共有を推進する、と言った方向性である。

こうした共同性を保証できる情報化の運営体制とシステム構成を考えることが、今後、文化資源のデジタル・アーカイブズを構築する上で推進すべき方向性の一つである。いうならば「フォーラム型デジタル・アーカイブズ」である。これが実現すれば、次のような効果が得られるであろう。

● 専門家占有から共有・共創へ

民族学研究者のみが専門性を持つという傲慢が否定される今、現地研究者・現地関係者・異分野研究者・非専門家が集い合うフォーラム型共同作業と知の共有の中にこそ、互恵的な成果が得られる。

●研究倫理の転換

研究者が一方的に現地から文化剥奪を行ってきた従来の手法から、現地の知的所有権を保証する研究手法へ転換し、一方的な剥奪から、現地との共有・共同型の情報収集と人類共通の知的財産形成へ、という流れを確立する。

●共有による情報の高精度化

現地関係者との共同による現地情報処理方式、いわば「ポイント・オブ・フィールド方式」情報化によって、情報収集・処理が高品質化される。利用者の serendipity（発見能力）を発揮させる手法である。さらに、精度の低い過去の民族誌記録に対しても、それを現地にフィードバックすることにより、現地から情報が追加され情報の質が高まる。

●現地への文化的還元

過去に集積された情報の現地との共有は、失われた現地文化の復元・伝承・復興に寄与できる。特に、グローバル化の進行と共に、既存文化の急激な変化が進む一方で、自文化表象・主張の手段として、失われつつある文化の復興に努める集団も増加している現在、現地への研究成果還元のかなき大きなチャンネルとなり得る。

●知識データベース構築の中から人類智発見へ

実世界の情報の宝庫である民族誌データに、データマイニング手法を適用すれば、人類智を表現する概念モデルとしての、人類智オントロジーの構築の可能性もある。

●文理融合の効果

もっぱら民族学研究資料としてのみ捉えられてきた民族誌資料は、環境・開発・平和など世界的な問題解決の糸口となる情報を含んでいる。人文系の情報を社会科学系や自然系の分野の人々とも共有するなかから、人文系と理科系の学問融合への架け橋となる。

(3) 生態史デジタル・アーカイブズと時空間軸

生態史研究を推進するうえで、文化資源のデジタル・アーカイブズを構築する意義は大きいだが、地域相互の関係性を、通時的に把握するためには、デジタル・アーカイブズを記述する基本要素として時空間軸を設定することが望ましい。すなわち、テキスト、画像、映像、音声等々、アーカイブズを構成する各マルチメディア・データを記述する基本項目として、時間値・空間値の2項をセットとして必須とすることである。言い換えれば、時空間値をデータベースの基本項目とすることにより、地図表現から各データへの展開、年表表現から各データへの展開、という二つの方向でのデータ提示が可能となり、それは、集積されたアーカイブズを共有化し、フォーラム型でデータ記述や修正を可能とする際のインタフェースとしても最適であるばかりでなく、様々な新しい知見を発見するうえでのインタフェースとしても極めて有効であろう。

こうした考えは、他の研究機関でも構想されており、例えば、カリフォルニア大学バークレイ校は、Electronic Cultural Atlas Initiative を立ち上げ、既存の文化資源データベース・サイトを全世界的に横断検索して、そこに含まれる時空間値を元に地図上に各データを展開するシステムを試作している。もっとも、時空間値を標準化することは極めて難しいことが指摘されており、未だに限定された地域のデータに対して試作されているに過ぎない段階である。全世界を対象とするならば、時間値についても、空間値についても、各地域・各時間における個別の表現形式（地名や暦年法）と標準表記との相互翻訳が可能で、地名シソーラス（地名自体も歴史的に変遷しており、時間軸と組み合わせねばならない）及びカレンダー・シソーラスが必須となり、その開発が容易ではないからである。さらには、多言語対応機能が必要となる。

本研究プロジェクトにおいては、地域と時間の両者に一定の限定条件を付し、実用的な時空間アーカイブズを構築することを狙いたい。壮大な全世界向けシステムを構想する前に、時空間アーカイブズの実用性と効果を示

したいためである。

年表、あるいは地図、両者の表現それぞれから、個々のデータへの参照や相互リンクをたどることのできるインタフェースを持ったアーカイブズ検索システムを用意することは、構築された既存アーカイブズからの発見・分析手段に有効であるばかりでなく、フィールドでのデータ収集や修正においても、威力を発揮し、特に、生態史という研究分野が持つ異分野融合の効果が発揮される事が期待できよう。こうしたインタフェースを備えたフィールドワーク・ツールを開発すれば、先に述べたポイント・オブ・フィールド方式によるフォーラム型のデータ収集が可能になるだろう。さらには完成したアーカイブズを目的別に編集して、時空間インタフェースを備えておけば、生態史あるいは広く地理・国際政治・歴史等に関する学習教材への展開が可能となるであろう。

(4) デジタル・アーカイブズ構築のための検討課題

文化資源をデジタル・アーカイブズ化して文化資源の共有を図るには、有形資源の蓄積とデジタルな無形資源の流通とを、有機的に結びつけるための課題を明らかにすることが肝要である。

①領域専門アーキビスト

資源化の流れの最上流の段階から考えてみると、まず、生（なま）の資料や情報を、共有に耐えるレベルにまで整理・分類などの処理を施し、文化資源化するには、原資料や情報の領域ごとの特性に応じた適切な処理が必要である。そのためには、各フィールドに関する専門的知識、および、資料・情報の組織化に関する専門的知識、の両者が必要となる。これらを合わせ持ち、各領域ごとの専門性を備えた「領域専門アーキビスト」の養成が、今後ますます重要性を増すであろう。当然このアーキビストには、デジタル化の光と影に対する深い認識が求められる。しかし残念ながら、日本ではアーキビストの重要性に対する認識が低く、専門性の社会的位置づけも未だ低い。これを改めるには、いわば「アーキビスト市民権」を確立するための、制度的、法的な整備が必要となろう。

②文化資源リテラシー

他方、民族学調査の場合のように、研究者がフィールド・ワーク途上で様々なメディアを用いて情報収集を行う際には、その後のアーカイブズ形成を見越した処理を施しておくことが望ましい。こうした資源化のためのノウハウやスキルおよび様々な資源利用のスキルの両者、すなわち「研究資源リテラシー」が、今後の人文社会科学研究者には求められる。このリテラシー向上を研究者に奨励するためには、資源化の作業が、正当な研究活動の一環として過不足なく評価される仕組みを導入することも検討されるべきである。

③文化資源の長期保存と利用の両立を図る手法としてのデジタル化

いったん形成された研究資源の長期保存に対する認識が低いことも大きな問題である。有形資源のみならず、デジタル化された無形資源についても、長期保存体制の整備が必要である。ただし、デジタル化にのみ焦点が当たり、原資料の保存が軽視される事態に陥ってはならない。デジタル化は、保存と利用を両立させる手法と考えるべきである。特に貴重な資料については、劣化を考慮した保存管理の体制を保証するような、法的・予算的な制度の確立が求められる。原資料の所有者との関係についても、十分な制度設計が必要である。文化資源として貴重な資料については、例えば、寄託制度や補償金制度などを確立すべきであろう。

デジタル化された資源の長期保存における問題点は、長期保存に耐える記録媒体に関するものよりはむしろ、コンピュータ本体やOSの変化にある。これらの変化にあわせて、データ形式の異なるデータへの移行（data migration）を確実にできる体制が必須となる。

すなわち、有形資源、無形資源の両者について、長期的に「持続可能な保存管理」という視点が必須と言えよう。

④データベースの個別多様性を担保する横断検索の手法

デジタル化された文化資源の流通に関連して、しばしば文字コードや検索手法等の標準化が語られる。しかしながら標準とは、あくまでもその時点での大勢に過ぎず、未来永劫続くことは保証されていないものであり、相互利用のための手段の一つである、と割り切る必要がある。個別データを標準に統一することはむしろ危険であり、個別領域でのデータの多様性を許容すること、および、複数の標準の間での inter-operability を確保すること、の二点を原則とするべきだろう。横断検索の手法に関する技術開発についても、ダブリン・コアや Z39.50 などの標準を活用する動きがあるが、ここでも、領域毎の個性・特殊性を確保しつつ、標準への翻訳

機能を付加する方向性が妥当と考える。

⑤知的財産権の保護と共有のトレードオフ

文化資源の公開・流通は、知的財産の保全と切り離して扱うことはできない。財産権の処理を個々の機関が行うことにも限界がある。一種の知的財産権処理センター的な組織の整備も必要である。しかし、現在の大勢である著作権保護を強化するプロパテントの流れは、資源共有とは相容れない部分の多いことも事実である。共有を促進するためには、Public Domain の考え方に基づく制度の整備も、考慮すべきではないか。例えば、研究資源の Public Domain として公的に認定された機関は著作権の一部、例えば、公衆送信権、貴重資料に対するデジタル複製権などを、免責される制度などもあり得るだろう。

(5) 博物館ネットワーク

モノと情報班が扱うモノは、さまざまな博物館に分散しているため、モノの調査や分析・検討には、資料を所蔵する博物館との協力・連携が不可欠である。また、本研究の成果となるデータベースは、生態史プロジェクトによるフィールド調査のみならず、関係資料を所蔵する博物館との共同研究と協力連携の上ではじめて実現する成果でもあるため、関係博物館それぞれにとって、所蔵資料の新しい利活用にも寄与できるような、共有データベースとしての「生態誌アーカイブズ」の構築を構想している。

そのための準備作業として、関係博物館所蔵の標本資料の利活用を検討する共同研究会を、国立民族学博物館・文化資源研究センター（平成16年設置）をベースにして開催する。この共同研究会（久保正敏代表）では、以下の3つ問題に取り組んでいきたい。

- 1) 標本資料の収蔵経緯や調査収集時の背景等、モノの歴史的背景の調査・検討。
 - 2) 共同利活用のための博物館ネットワーク構築。
 - 3) 協力連携の成果でもある「生態誌アーカイブズ」の公開および共有に向けたガイドライン作成とその協議。
- （文責：久保正敏）

3. さいごに

過去の調査資料とその蓄積が、今回のような枠組で活用されたことはまだかつてない。従来の物質文化研究では、モノの個性がもつ意味が看過され、また、モノが、文化全体との関連や社会経済変化、あるいは生態環境との相互作用などの動態を読み解く契機として扱われてこなかったことによる。こうした背景を踏まえれば、モノと情報班の試みは、以上に述べた偏向を是正するだけでなく、新たなモノ研究の地平を開拓し、その大いなる展開を目指すものということができる。

なお、本報告以下にモノと情報班の個人報告がつづくが、そこには全体報告（モノと情報班の活動計画）へのコメントとして寄せられた、沖縄でのワーキング・セミナー参加者（講師）角南聡一郎氏、山田仁史氏からの寄稿も含まれる。また個人報告の執筆者それぞれが、方法論検討、対象コレクションの検討、事例検討・先行研究紹介の3点に目配りしつつ内容をまとめているが、3点のどこに力点を置いているかに応じて個人報告を大別し、以下の目次のような構成・順序に個人報告をまとめた。

個別報告 目次

Ⅱ. 取扱い注意！－視点と方法

「東南アジア大陸部諸社会の文脈からみたモノ研究の可能性

－「モノと情報」班ワーキング・セミナーの活動を通して－ …… 清水郁郎

「物質文化情報化のための方法論再考」 …… 後藤 明

「モノはいかに保存・活用するべきか－近現代物質文化を題材に－」 …… 角南聡一郎「Diffusion をめぐって

－人類学と歴史について若干の補足－」 …… 山田仁史

Ⅲ. コレクションの背景を探る－資料解説と活用可能性

「天理参考館収蔵のラオス標本と天理教ラオス伝道について

ー 1965年～1978年にラオスと関わった邦人宗教家達の足跡ー」・・・吉田裕彦

「生態誌アーカイブズ構築における原野農芸博物館コレクションの活用」・・・小島摩文

「黎明館川野資料の成立背景とその内容ー漁具を中心にー」・・・橋村 修

IV. モノから見える世界の広がりー事例と解題

「建築研究の可能性ー家屋・モノ・人間ー」・・・清水郁郎

「ミャオ族の民族衣装が結ぶ文化ーモノ研究の視点からー」・・・宮脇千絵

「竹の焼畑と稲作儀礼ー竹林文化論への試みー」・・・川野和昭

参考文献

安齋正人 1985 「補遺：ラオス国先史洞穴遺跡調査の覚書」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第4号：55-101。

Claridge,G.F., Thanongsi Sorangkhou and Ian G. Baird 1997 Community Fisheries in Lao PDR: A Survey of Techniques and Issues. IUCN-The World Conservation Union, Vientiane, Lao PDR.:41-44.

原野農芸博物館 2000 『原野農芸博物館収蔵品目録 Iー東南アジア大陸部』、財団法人奄美文化財団・原野農芸博物館。

伊藤幹治 1988 「日本の文化人類学の歩み」伊藤・米山編『文化人類学へのアプローチ』291-299。

Murdock, G.P., Ford,C. S., Hudson, A.E.,Kennedy, R.,Simmons, L.W.,Whiting,J.W.H

1982 Outline of Cultral Materials.(5th edition),Human Relations Area Files,INC.

西秋良宏 1999 「ニューギニアの弓矢」東京大学総合研究博物館ニュース『Ouroboros』第8号。

大林太良、杉田繁治、秋道智彌編 1990 「東南アジア・オセアニアにおける諸民族文化のデータベースの作成と分析」『国立民族学博物館研究報告別冊』11号。

笹原亮二 2003 「量の可能性」(特集「モノ世界のフィールドワーク」)『民博通信』No.101：14-15。

佐藤健二 2002 「図を考える / 図で考えるー形態資料学と「絵引き」」『文化資源学』第1号、文化資源学会：7-16。

澁澤敬三 1984 (1954) 「絵引きは作れぬものか」澁澤敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編『新版絵巻物による日本常民生活絵引』、平凡社：viii - ix

田口理恵 2002 『ものづくりの人類学ーインドネシア・スンバ島の布織る村の生活誌』、風響社。

2003a 「マテリアル・ワールドとの格闘」(特集「モノ世界のフィールドワーク」)『民博通信』No.101：11-13。

2003b 「人類学の教科書・概説書リストについてープロジェクト基礎資料の作成から」、『概説書の分析を通して見る戦後日本の民族学・文化人類学教育の再検討』(平成14年度公益信託渋沢民族学振興基金・民族学振興基金プロジェクト助成研究報告書)、TIGAR 研究会。

2004a 「岐阜・祖父江の竹箴 その2 箴羽のできるまでー製造の手順」『月刊染織α』No.274：37-40。

2004b 「博物館コレクションをコレクションするーモノ研究からみたメコン流域地域収集の民族資料の可能性ー」、『Asian Studies Watching 論集ーアジア学の最前線』(アジア研究情報 Gateway、東京大学東洋文化研究所 <http://asj.ioc.u-tokyo.ac.jp/html/017.html>)

東南アジア稲作民族文化総合調査団 1959 『メコン紀行：民族の源流をたずねて』読売新聞社。

梅棹忠夫 1979 『東南アジア紀行(上)(下)』中央公論新社。

山本利雄 1971 『メコンの渇きーラオス巡回医療班の記録』講談社。

注

¹ ここで述べる「目的と展望」は、関係博物館に対して資料に関する情報収集利用への協力をお願いするために作成した「研究計画書」の内容に即しつつ、修正、加筆したものである。「研究計画書」は、秋道智彌によるた

たき台をベースに、田口理恵がその骨子に沿いつつ、説明を補足し加筆修正を加えて全体を作成した。計画書の草稿をもとに、久保正敏、秋道、田口で内容を協議しつつ、完成させたものとなる。

² 生物資源研究のなかでも、生態人類学や民俗植（動）物学等の研究蓄積は、生物資源利用にみられる“土着の知識”の豊かさを明らかにしてくれる。ただしそこでは、生物資源の利用が有用性という観点から分析されるために、多様な用途が羅列的に提示されることになる。もっとも、モノと情報班のメンバーがこだわるのは、食料、薬、衣料用、建築用材、換金用等々で大きく括られる用途のより詳細な内容である。例えば、竹を割る、削る、編みあげる等々、採集した素材を加工し竹製品を作り上げていく一連の過程は、その作業段階ごとに、素材が内包する異なる特性を引き出し利用していくプロセスでもあるといえる [田口 2004a]。そうした、人の手で加工し道具として使ってきた経験のなかに見る、素材・対象がもつ複合的な特性の理解とそれらの利用に固執するからこそ、モノ研究として、天然物、生物資源ではない、“人工物 artefact”を対象にするのだということを強調したい。

³ 本節に述べる内容一部の概略は、構成を少し変えまとめたものを、別紙にて発表している [田口 2004b]。

⁴ これらの番号は標本管理上の整理番号で、一点一点に付された標本番号ではなく、例えば【02-026】ならば、02は平成2年登録を意味し、026はその年度内に、収集、購入、寄贈された一まとまりの標本群に、収蔵された順に付される整理番号である。

⁵ この採集資料品目リストは、日本常民文化研究所にて閲覧させていただいた。

⁶ 「ラオス国考古学調査」の「昭和51年度科学研究費補助金計画調査」より引用。野生動植物の採集、その道具・技術への興味関心は、フィールドノートおよび1975年2月20日付けで書かれた「ラオス調査所見、特に食物について」と題するエッセイ草稿からもうかがい知ることができる。

⁷ 博物館所蔵資料の基礎的データの作成作業では、上記博物館の関係者をはじめ、さまざまな方にご協力をいただいた。特に、稲作調査写真資料では、写真台帳の撮影作業に中尾知恵さん、佐々木万珠さんに、稲作写真資料の情報入力作業では、佐々木さん、吉村恵美子さんに、原野農芸博物館、天理参考館、川野コレクションの収蔵品リストの入力作業等では吉村さんに、ご迷惑をおかけするとともに、多大なるご協力をいただきました。今年度の作業を進めるにあたってご協力くださいました方々に、この場を借りて御礼申し上げます。

⁸ フィールド調査で出会うラオスの人々にとっての人生の節目や、暮らしぶり、生活環境や時代の変化のきっかけとして記憶し認識している出来事というものも当然あるだろう。それらを人々がどう語るのかを含めて、個別のライフヒストリーを集め、そこから、彼らにとっての転換期を再構成し、変化を辿るための時間軸を設定する方法もある。もっとも調査者の側が、聞き取りからそうした認識に接近する、あるいは分析し抽出するためには、当然ながら調査者の側に、聞き取り情報を比較対照し、俯瞰するための何がしかの基準が必要となる。モノと情報班が扱う博物館コレクションと関連資料は、そのための時間指標として便宜的に用いることができるだろう。

⁹ 第一次稲作調査団資料ではなく、日本民族学協会コレクション全体として考えると、そこには戦前のアチックミュージアムの活動の遺産から、昭和17年に財団法人日本民族学協会の設立以前の日本民族学会附属民族学研究所時代の収集品、戦後の日本民族学協会による諸活動の遺産が含まれる。同コレクションは、さらに複雑で多様な履歴を抱え込んだモノのコレクションとなる。

¹⁰ 海外学術調査『メナム河上流（マーピン河）地帯における山地および平地諸民族の交錯過程の実態的調査』（白鳥芳郎代表）。

¹¹ 70年代の天理教巡回医療団派遣やその当時、および80年代後半以降の日本政府によるラオスへの医療援助との関わりなど。それ以前では、東南アジア稲作民族文化総合調査団メンバーが、1957年当時プロベン高原開発のからみでパクソンにて活躍していた、フィリピンのオペレーション・ブラザーフッドの医師団の動向を書き留めている [東南アジア稲作民族文化総合調査団編 1959:112、浅井、河部、松本他 1959:128]。このオペレーション・ブラザーフッドは1957年から1975年まで、ラオスにて医療、技術、教育面支援のために活動していた。1965年までに約900人のフィリピン人スタッフが、ラオスに滞在して活躍していたという。

¹² 道具の検討会（漁具の会）における秋道智彌の報告「モノとしての漁具研究の可能性」。